

西教寺十四世釋俊雄（院号會中院・俗名岩崎俊雄）略歴

祖父俊雄は、一九〇九（明治四十二年）、滋賀県彦根市安立寺住職伊吹正徹、同坊守よしの三人息子の二男として誕生した。父は布教使で、寺を空けることが多かったため、父の代わりに五・六歳頃からお参りしていたという。お参りには、井伊家に奉公していた俊雄の祖母ミサヲが同行、後ろに座り、後で「今日は何力所間違った」と厳しく育てられた。そのため、祖父俊雄は、浄土三部経を甫（ち）公（ち）天（てん）にあげることができた。

滋賀一中を経て龍谷大学に進学、豊水楽勝教授（勸学寮頭・三原市寂静寺）について宗学を学んだ。一方、英語が大好きで、英語弁論部に所属し弁論大会にも出場した。祖父はハイカラでおしゃれな人であった。

一九三二（昭和六）年二十二歳の時、豊水師の紹介で岩崎ナヲと結婚、西教寺に入寺した。結婚式当日、

二人はお互いがいただいているところの「ご安心（信心）」について夜通し語り合ったという。三日間の披露宴が終わり、片づいた庫裏に残っていたのは火鉢一つだけだった。金屏風などの道具類は全て借り物で、貧乏なお寺であった。しかし、二人の心は確かなご法義で結ばれ支えられていて、きつと明るく安らかであったにちがいないと思う。

結婚当時の祖父は、まだ宗学を研鑽中であつたため、新婚生活は京都で送った。数年後帰郷し、一九三六年（昭和十一年）、住職を継職。同年、長女ヤヲ、翌年二女カヲを授かる。過日、母（ヤヲ）に祖父の思い出を尋ねると、「人の顔色をつかがって暮ら

さずに阿弥陀さまの方だけを向いて生活しなさい」と言われたことだと教えてくれた。祖父のお念仏は、厳しく真摯なものであつた。

また、祖父の言葉は死ぬまで江州（滋賀）弁であった。関西なまりは、呉人の耳にはやさしく響く。

今でも時々ご門徒から、「穏和な方で、まさにお坊さんという方でした」「仏さまみたいな方でした」と褒めていただく。私も幼い頃、いっしょにいるだけで心が落ち着いた。祖父は「和顔愛語」の人であつた。

祖父が三十歳代の頃は、日中戦争、太平洋戦争と、どんどん戦火が激しくなっていた。海軍の拠点であつた呉はどんどん人口が増え、西教寺のご門徒も増えていった。皆さんのご懇念により、一九三八（昭和



岩崎俊雄（写真左下）と岩崎ナヲ（写真右上）

失、たくさんの方が生命を落としました。祖父の実家の兄慈徹も、同年戦死している。

あるご門徒さんが私に次のように話してくれたことがある。「戦時中食べる物もなくて、皆の心がすさんでいた時も、お寺さんは日曜学校をして私たちを明るく楽しくしてくれました。たくさん大事な事を教えてください。くださって本当に感謝しています。」と。

十三）年に三津田説教所、一九三九（昭和十四）年には蔵本通説教所を建てかえ大伽藍が建立されるが、一九四五（昭和二十）

年七月二日未明からの呉空襲であえなく焼

元仏教青年会だった方も「あの時は楽しかった」と話される。それらを聞くにつけ、お寺とは、祖父がそうしてきたように、「楽しいところで、大事なことが学べる場」でありたいと思う。

敗戦後、焼失した三津田説教所は、一九五〇（昭和二十五）年と一九五七（昭和三十二）年に再建、蔵本通説教所も一九四七（昭和二十二）年と一九六二（昭和三七）、一九八九（平成元）年に再建され今日に至る。

それから、祖父はよく勉強した人であった。エアコンもない経蔵でいつも勉強していた。一九五三（昭和二十七）年学階司教、一九七二（昭和四十七）年勸学職を拝命、真宗学寮学頭として、安芸のご法義繁盛に力を尽くし、皆さんから和上さんと呼ばれて大切にしていた。専



門は中国善導浄土教で、著書に、『観經玄義分序説』、『現代を生きる心（共著）』がある。

一九九二（平成四）年、数え年八二歳で往生。院号の會中院は、「直入弥陀大會中」（善導大師『往生礼讃』）から頂戴したもの。ちなみに、祖父よりも九年早くお浄土にかえった祖母（ナヲ）の院号は直入院。二人は本当に仲が良く、互いを大切に合っていた。二人はどまでもいっしょにごうごうである。

最後に祖父は、祖母だけでなく「〇〇さんがおられないと捜しに行かないでもいいよう、どなたも必ずお浄土で会いましょうね。」とよく話していた。「弥陀大會の中に入る（阿弥陀さまの集いの中に入って今生も後生も共に生きる）」という意味を味わいたいと思う。（釋智寧・住職）

灰峰山西教寺十四世（前々住職）

釋俊雄 院号會中院 俗名岩崎俊雄 三十一回会

差定（プログラム）

一、勤行（おつとめ）

三奉請

表白

正信偈和讃

浄土真宗の生活信条

一、ご法話 高松秀峰先生

（真宗学寮理事長）

一、謝辞 岩崎智寧

（当山住職）

以上